

1. 活動の経過と概要

a. 活動の目的

大阪歴史博物館に所蔵される縄文時代資料「下郷コレクション」は、1921年（大正10）、滋賀県長浜市に開設された鍾秀館（下郷伝平により設立）と呼ばれる資料館において旧蔵されていたもので、その多くは、明治時代末から大正時代初頭にかけて高島多米治という人物によって採集されたことがわかっている。考古学の黎明期における個人採集資料として今日までその形を残し伝えられていること、かつその経過の中でいくつかの概説書やカタログなどに資料が掲載されてきていることなど、その価値は高く評価されてよい。

本研究は、下郷コレクションを今日的な視点で再検討するべく、①その構成内容を明らかにする、②高島多米治の活動ならびに下郷伝平（または下郷共済会）との関係について追跡する、という2点を目的として開始された。また①についても、より具体的な課題として、数量の上でもっとも多くの点数を有する茨城県福田貝塚と椎塚貝塚の資料を対象とした調査を行うこととした。この2遺跡は、高島多米治本人が調査した記録を当時の学術雑誌にも投稿するなど直接関わった経緯が明らかになっており、重要な資料群であることがその理由である。

b. 2009年度（平成21年度）における活動概要と研究体制

2009年度は着手初年度ということもあり、まずは福田貝塚（および薬師台）の個体確認をするために、現状で復元されている土器の写真記録を主眼とした。その結果、福田貝塚132点、薬師台貝塚45点の写真撮影を行うことが出来た。その所見成果は、本書の阿部氏報告においてまとめられている。

また、共同研究者各位と対象選定について討議を行った結果、コレクション内に含まれる福田・椎塚貝塚の採集資料がきわめて大量であることから、当面、土器・土偶を中心とした作業を実施し、土製品・石器・骨角器についてはその後に着手することを確認した。

さらに2010年1月31日には、明治大学日本先史文化研究所との共同調査として、茨城県福田貝塚ならびに椎塚貝塚での現地踏査を行った。その結果、福田貝塚においては、高島の採集地点と思われる竹林と、1970年代に古代学協会により行われた発掘地点（神明前地点）の位置が確認できた。両地点は直線距離で100mほどの距離しかなく、どちらも非耕作地であった。いずれも土器片・貝殻片がいまなお散布しており、採集当時の状況を彷彿とさせるに十分であった。

椎塚貝塚は、所在する丘陵西面が農道整備により一部削られるなどの状況が見て取れ、その断崖面には崩落した貝殻片なども散乱していた。福田・椎塚貝塚はいずれもいまなお盗掘が行われているらしかったが、椎塚貝塚での状況は福田貝塚よりも盛んに行われている印象を受けた。

当該年度の外部共同研究者としては、以下の各氏に委嘱した。

- ・阿部芳郎氏（明治大学文学部教授）
- ・川村勝氏（美浦村教育委員会）

c. 2010年度（平成22年度）における活動概要と研究体制

前年度の調査結果を受け、当該年度には具体的なリスト作成の作業を行った。この作業は阿部芳郎氏を中心として、明治大学日本先史文化研究所の協力を得て実施された。その際、当コレクションを活用した文献のうちもっとも多数の資料を掲載していた杉山寿栄男による概説書図版との照合を行った。その成果は本報告のリストならびに須賀氏報告として結実している。

他方、高島多米治の足跡を調査する活動として、当コレクションに含まれる岩手県瀬沢貝塚の資料をきっかけに、当地での調査を行ったところ、霞ヶ浦南岸地域における活動と同様に、高島自身が直接当地に赴いていたことが明らかになった。

当該年度の外部共同研究者としては、以下の各氏に委嘱した。

- ・阿部芳郎氏（明治大学文学部教授）
- ・川村勝氏（美浦村教育委員会）
- ・八木勝枝氏（岩手県立博物館）

d. 本報告と既出の成果実績

以上の経過をもって進められてきた当共同研究事業は、本来であれば2010年度末をもって報告書を刊行する予定であったが、研究成果の豊富さから、本課題単独での報告書作成を行うことが望ましいと考えたため、2011年度（平成23年度）の刊行を企図することとなった。

なお、本共同研究の成果の一部が、下記の通り報告されている。

- ・阿部芳郎氏

「考古コレクション形成過程に関する基礎的研究 下郷伝平コレクションにおける椎塚貝塚・福田貝塚資料の由来」『駿台史学』第142号 2011 駿台史学会

- ・須賀博子氏

「園生貝塚の研究史と後晩期の大型貝塚」『東京湾巨大貝塚の時代と社会』先史文化研究の新視点Ⅰ，2009，明治大学日本先史文化研究所

- ・加藤俊吾

「近代における縄文時代コレクションの形成とその活用－高島多米治採集資料を題材として－」『土偶と縄文社会』先史文化研究の新視点Ⅲ，2012，明治大学日本先史文化研究所(2012年3月刊行予定)